

－夏季大学雑感－

第23回夏季大学「新しい気象」講座雑感

日本気象協会北海道支社 中田 琢志

第23回夏季大学「新しい気象」は、去る7月26・27日に開催され、21名の受講者に参加いただきました。

今年度も、やや少なめの参加者でしたが、熱心に聴講され、和やかな雰囲気のうちに無事終了しました。ただ、台風7号のため、気象台見学が中止になったのが残念でした。

1日目は、札幌市青少年科学館で「北太平洋中層水～オホーツクで生まれる太平洋で一番重い水～」（講師：北海道大学低温科学研究所教授 三寺史夫氏）、「最新の民間天気情報～北海道は天気予報の激戦地～」（講師：日本気象協会北海道支社 賀久正則氏）の講義と館内見学を行いました。

三寺講師は、低塩分で特徴付けられる北太平洋中層水に着目し、その起源をたどるとオホーツク海に行きつき、さらにたどるとオホーツク海北西陸棚域にたどり着く過程についてお話をされました。その重要な過程である、千島列島の潮汐による海水交換や、流氷生成時の酸素を多く含む海水の生成メカニズムを興味深くご説明いただきました。

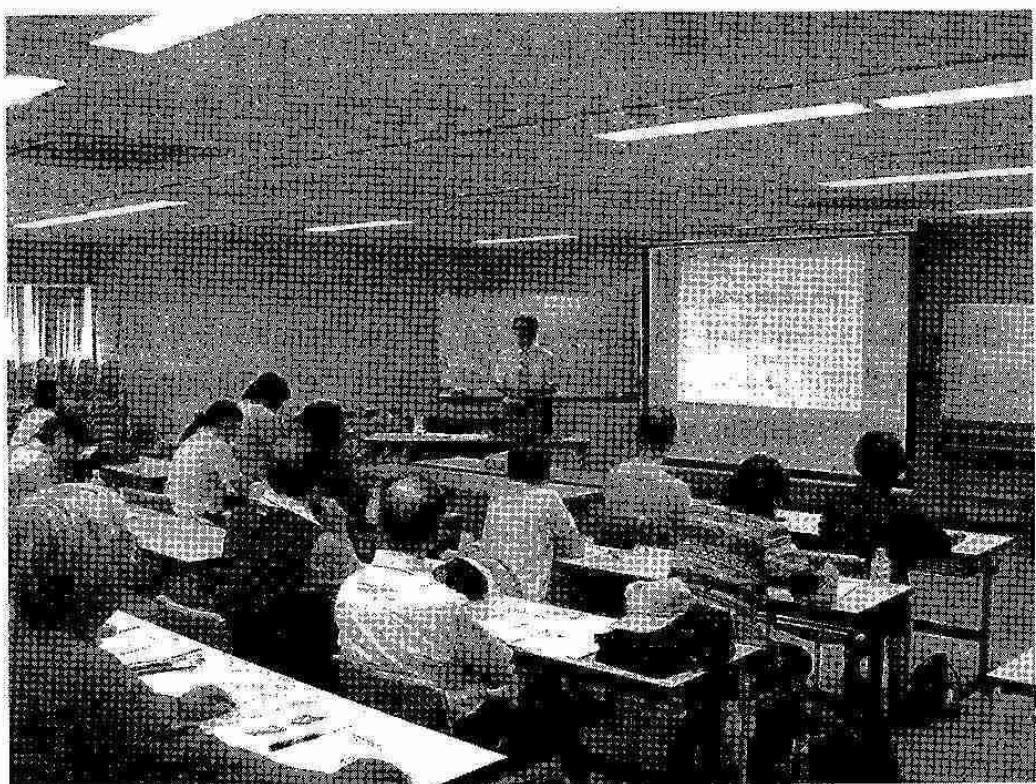
賀久講師は、最新の天気予報事情を、わかりやすく説明されました。民間気象事業者は気象庁から入手した基礎資料を元に、ポイント時系列予報や、ワンちゃん夏ばて予報といった、新しい気象コンテンツの開発に取り組んでいるとのことです。メディアによって、予測が異なるので、その良し悪しは利用者が自分で判断する必要があるとのことでした。

2日目は、日本気象協会北海道支社で「生態系と微生物～地球を支えるミクロの生物圏～」（講師：北海道大学低温科学研究所教授 福井学氏）、「地震は繰り返す～同じ場所で同じ大きさの地震が起きる～」（講師：札幌管区気象台長 濱田信生氏）の講義を行いました。

福井講師は、一般の人達が何気なく接している「微生物」の世界とその役割について、興味深くお話ししていただきました。温泉の中の微生物と雪の中の微生物に焦点を絞り、身近な微生物の調査から、37億年前の地球の生命の起源を探る、壮大なお話でした。南極の循環湯のお話や露天風呂の勧めなどをちりばめ、楽しく聞くことができました。

濱田講師は、東海・南海沖をはじめ、カリフォルニアや十勝沖などで、同じような地震が周期的に起こっていることから説き始め、断層のメカニズムを説明されたあと、「アスペリティ（地震の際のすべり量の大きいところ）」の概念を用いて、似たような、または、若干異なる地震が周期的に起こる仕組みをわかりやすく説明されました。

今後は、今回以上に多くの方々にご参加いただきたく、会員の皆様に置かれましては、宣伝方よろしくお願ひいたします。



受講風景（札幌市青少年科学館）



受講風景（日本気象協会北海道支社）